

健康長寿プロジェクト

地域みなさんと共に大阪大学箕面キャンパスの跡地利用を考える



大阪大学Innovation Bridge グラント
【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】

大阪大学箕面キャンパスという 土地を受け継ぎ、地域の自然と 人と世界をつなぐ拠点に



大阪大学公式サイトより



豊かな環境との対話



健康長寿を生きる場



開かれた多様性のつながり

地域を開く、地域で開く

— 伝統を受け継いだ利用の可能性 —

プロジェクト代表
大阪大学言語文化研究科
教授 深尾葉子



箕面キャンパスの周辺地域は、外国人の居住者も多く、自然にも恵まれ、学術拠点も多く、世界から人々が訪れる場所としての潜在力を持っています。地域の人々だけではなく、海外からこの地を目指して訪れた人々が短期長期で滞在し、健康な生活を送るための拠点として活用することが期待されています。そのためには、京都・大阪に近接したインバウンドツーリズムの拠点として、より開かれた地域として、活用してゆく視野が必要です。

何よりも重要なのは、我々人間が、自分たちの狭隘な目的や利益や短期的目標にとらわれず、この地球上で受け継いできたすばらしい自然や野鳥の囀りや動物とのコミュニケーションをとりもどし、謙虚な気持ちでみずからの地域社会や経済や文化を紡ぎ出してゆくことです。

そのことを具体的な活動に結び付けるイノベーションを、いままさにこの地で引き起こすことが必要とされているのです。





地域に愛されてきた箕面キャンパス。
様々な利害関係者が会議に参加し、
心配なことを思う存分言葉にする。

学内協力者
大阪大学言語文化研究科
准教授 今岡良子

私は、国連生物多様性の会議に参加し、Multi Stakeholder Process (MSP) を経験した。関係者が対等な立場で情報交換し、対話による合意形成をはかる手法だ。いまでは、内閣府もこの方法を奨励しているが、まだ認知度も低い。箕面キャンパスの内と外のコミュニティ。それは、Stakeholder の中で中心に置かれるべきである。にも関わらず、現在においても、合意形成の外に置かれ、情報を得る窓口も持たない。MSP が当たり前の社会になるよう不断の努力をすること、身近なコミュニティとのコミュニケーションを心がけることの大切さを思う。

箕面発植物の活用～ユズを一例に～

学内協力者
大阪大学 総合学術博館
特任講師 伊藤謙

今回の箕面のプロジェクトにおいては、柑橘類“ユズ（柚子、学名：Citrus junos）”の可能性について、薬学的見地からの話をさせていただいた。ある一定の科学的根拠を有しながら、地元で産する有用植物に付加価値をつけて活用することは、非常に意義あるものと考えている。加えて、箕面キャンパスの中には様々な植物が生息しており、その中には漢方薬や民間薬などで使用される植物も見受けられる。地域に自生する薬用植物に注目した探索も、ある種のエコツーリズムとなる可能性が考えられよう。





みなさんからのご意見

キャンパスはキャンパスのままで市民に活用を。昨今の地震であまり被害を受けていない建物ならば、まだまだ使うべし。市役所の一部が移転してもいい。教育住民環境に活用を。癒しを求める子供・市民のために使えばいい。コンサルタントは全く必要ない。市民プロジェクトに使えば...

ここがなくなることは寂しいことですが、何とか自然を守って子供も老人も利用できるような施設に変わってくれることを願っています。大学の中にこのような動きがあることをもっと早く知っていたら力強かったのにと思っています。



夜の散歩も治安が良く、管理が行き届いている外大キャンパスは貴重な存在です。今から10年前は科目履修生として3年間学生として楽しく過ごしました。今後はこの広大な自然を残した文化施設として残ってほしいと願っています。

新しいプロジェクトの情報公開を十分にしてパブリックコメントの内容を充実させる方法はできないか？

このキャンパスには思い出が多く、ぜひとも緑を最大限に残し、国際的な福祉施設、老人と子供たちが交流できるような施設、老人ホーム・幼稚園保育所・医療施設等ができたらと願っています。



跡地利用について

(一般参加者のみなさんへのアンケート調査結果より)

- 国際的な交流、イベントの場にしたい。
- 学校や研究所になればと思います。それこそ、運動場を薬草畑にし、統合医療の研究所になればと思います。役行者、実生ゆずとの縁もあることですし。
 - 馬と触れ合える場所に。
- キャンパス内のあちこちにあるヤマモモの木をぜひ残していただきたい。かつての里山の境界を示す貴重な遺産です。
 - 交通アクセスが悪い場所ですので、イベントにしても何に使えるのか不明。
 - 自然を有効活用してほしい。

- 
- 市民にも使えるようにしてほしい。
 - スポーツ施設や、図書館、レストラン等があるとうれしいです。
 - 建物やレイアウト等残しつつ小さな会社等が入るコワーキングスペースなどの活用があれば楽しそうです。
 - 市民、若い世代も半分以上入れる構想委員会をつくって、専門家とともに案を作る。行政はその提案を聞く。
 - 移転には今でも反対です。
 - 立派な建物、有効活用できればいいのでは。
 - 周辺住民の文化的生活に寄与する施設になればうれしいです。
- 



プロジェクトに寄せて

大阪大学法学研究科教授



福井康太

外大・阪大箕面キャンパスの跡地の開発が、緑を残し、また地域に愛され、世界から人が集まるような場所としての意味を失わないような方向で進められることを切に願っている。





祖父は、外大卒業で中国語の教授をしていましたが、まさかその跡地をどうしていくのかを箕面市議の立場で考えることになるとは本当に不思議です。権力を持つ側の一方的な裁量で決められることがないように、市議として、外大にご縁をいただいた家族として、みなさんと共に一緒に作っていきたい…と思っています。





箕面キャンパスでの教育・研究を振り返ると、粟生間谷という環境と多くの意欲的な教員・学生との出会いがあった。共に「地球環境論」、「地球開発論」という総合科目を立ち上げ、Think globally, act locally. をモットーに、国内外でのフィールドワークの出発点になった場が箕面キャンパスであった。

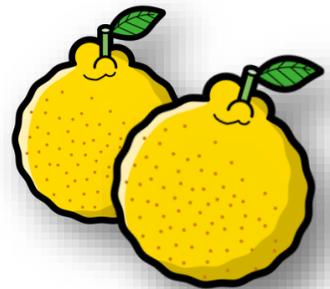


(有)re•make代表取締役



岡山栄子

北摂地区の「健康長寿」は、「箕面特産の実生ゆず」から。人にも自然にもやさしく誰もが安心して暮らせる健康長寿のまち北摂地区の未来図を、ここに暮らすみなさまと産・学・官が一緒になって、知恵を出し合い協力して描いて行きましょう。高高齢化の時代を健康に生き抜くために！





私は間谷住宅の住民でもあるので、箕面キャンパスの移転について、大学関係者と地元住民が顔を合わせ、ともに考える機会をつくっていただいたこのプロジェクトに、とても感謝している。小さな声や動きを敏感に感じとりながら、すべての人がありのままに、その存在を大切にされるように、目に見えていることの裏側にある奥行や深さを大切にしていきたい。





大阪大学間谷キャンパス（旧大阪外国語大学）
跡地利用の考え方

学外協力者 流通科学大学
教授 上田義朗

大阪大学跡地利用について提案
—世界とアジア諸国のモデルとなる生涯活躍の
「学校村：Village of Schools」創造—

【キーワード】

①教育

大阪外国語大学・大阪大学外国語学部の歴史と卒業生の
の思いを継承

②外国人

日本の労働人口減少に対応するには外国人材は不可欠

③医療・介護

高齢化社会の先進国である日本の現状に対応

④健康・スポーツ

青少年の育成と成人の健康維持に寄与

⑤共生

高齢者・外国人・青年の起業やビジネスの交流促進

⑥大阪大学

移転先の図書館共用のみならず、大学の知的情報発信拠点
としての機能を活用

下記の提案は、複数の単発的な私見を列挙・提起したにすぎない。体系化した提案は、さらなる議論が必要である。



① 「CCRC構想」を進化・適合させた 日本初の本格的なシニア都市の具現化

CCRC (Continuing Care Retirement Community) とは「継続的なケア付きの高齢者たちの共同体」。仕事をリタイアした人が第二の人生を健康的に楽しむ街として米国から生まれた概念。元気なうちに地方に移住し、必要な時に医療と介護のケアを受けて住み続けることができる場所を指す。ただし、大学跡地の起伏のある地形は、介護対象者の車椅子の移動には不適當という意見がある。したがって大規模な介護福祉施設の建設には懸念がある。

② 「職業訓練学校ビレッジ」(=「学校村」)の創設

主に外国人学生向けの介護福祉専門学校・調理専門学校・日本語学校など、さらに日本人向けの外国語専門学校等を誘致する。これらは退職者・高齢者の再学習の機会を提供することにもなる。

③ 外国人留学生・外国人技能実習生と退職者世代のコラボレーションの空間創造

上記の②を補足して、外国人に対する教育・指導・技術移転・文化紹介・協働・共同起業・ボランティア活動の機会を高齢者向けに提供する。

④ 生涯に渡る学習・スポーツ・起業・ビジネスが可能な「長寿健康のまち」の創造

特に「生涯スポーツ」の推進は、すべての国籍や世代の人々にとって健康年齢の向上のために不可欠とみなされる。長寿健康のためには、身体的・精神的な充実感が不可欠であり、その双方を提供する。

⑤ 大阪大学医学部付属病院と連携した外国人富裕層向けの宿泊施設の建設

特にアジアの外国人富裕層の診断と治療と家族向けの長期滞在が可能な「5ツ星ホテル」の誘致。これは、地元住民にとっても利用できる施設になりうる。

⑥ 高齢者に向けた「生涯活躍」という新しい住環境モデルを提供

日本人の高齢者世帯の転居については、「都心の高層マンションに移住」と「田舎の旧家に移住」という極端な「終活」の現状がある。

それに代わる都市近郊の箕面市に「生涯活躍」の居住地を提供する。

⑦ 近隣の農家と連携した有機野菜の栽培と消費

すでに進行中であると思われるが、箕面市内および特に間谷地区の農家の協力に基づいて「地産 地消」の実現を目指す。より積極的な箕面市特産物の販路拡大の支援が期待される。

⑧ 箕面市内で「住環境サイクル」が完結する

通常の住宅転居のサイクルは次のようになると思われる。

①新婚時代の2人暮らし⇒②子育てのための戸建て住宅・二世帯同居・二世帯近接・広面積の賃貸住宅⇒③住宅リフォーム・賃貸住宅 転居⇒④介護付きアパートなど⇒④介護福祉施設。これらの住環境のすべてを箕面市内に用意し、住民の移動を箕面市内に完結させる。

いずれにせよ、広く市民や関係者が自由に跡地利用を考える時間が必要と思う。この意味でこのような報告書の出版・公開は、今までの箕面市の不動産開発プロジェクトでは前例のない有意義な企画であると思われる。学外者であるにもかかわらず、本プロジェクトの私の参加に快諾を賜った深尾葉子先生と研究室の皆さんに感謝を申し上げたい。

今後の展望

—新たなソーシャルイノベーションに向けて—

大阪大学箕面キャンパスの跡地利用に、市民や地元
の住民、大学関係者は何を望んでいるのか。

大阪平野を眼下に望む美しいこの間谷の地を、次の
世代に受け継ぎ、もともとあった美しい里山のもたら
す豊かな環境と命を活かし、人間と動物がともに生活
世界を共有し、市民が自分たちの場所として活用する
場を創りだし、その活動そのものが新たなビジネスチ
ャンスとなって地域に豊かさや活力をもたらすこと、
それが次世代に受け継がれる真の開かれたまちづくり
の使命なのではないだろうか。

今回の一連の試みは北摂の地をベースにイノベーシ
ョンの連鎖が起きる一つの大きなきっかけとなり、す
でに新たな繋がりや渦がまわり始めている。

研究代表者
深尾葉子

実施完了イベント報告

【第1弾】 箕面で花開く国際交流の実践の輪とこれからの課題

【第2弾】 野外体験馬車イベント

【第3弾】 阪大箕面キャンパスと世界を繋ぐ

【第4弾】 世界に発信！箕面産実生ゆずの魅力

【第5弾】 日本から見る中国 中国から見る日本～等身大の目線で考える～

【第6弾】 間谷キャンパス 40年～思い出を語り、未来を語る～

大阪大学

Osaka University



大阪大学Innovation Bridge グラント

【大型産学共創コンソーシアム組成支援プログラム】

健康長寿を実現する北摂市民による住民参加型プロジェクト

発行者：大阪大学言語文化研究科 深尾葉子（研究代表者）

発行日：令和元年8月31日